

第8回 TOKIWA 高校生英語プレゼンテーションコンテスト 2020年10月17日 於：オンライン (Zoom)

第8回 TOKIWA 高校生英語プレゼンテーションコンテストが、10月17日(土)、県内外6校から8名の参加者を得て、初の試みとなるオンラインの形式で開催されました。当日は、本学事務局側でのオンライン配信に一時トラブルがあり、参加高校生に心配をおかけする場面も発生いたしましたが、参加高校生がそれぞれ自信をもって発表に臨んでくれたことで、お陰様で無事終了することができました。開催にご協力を賜りました皆様に、改めて厚くお礼申し上げます。

当日、素晴らしいパフォーマンスを披露してくれた高校生たちの発表の一端を、ここに紹介させていただきます。



プログラム冒頭、富田敬子学長から、コロナ禍でのオンライン開催となった今回、果敢にチャレンジした高校生8名にエールが送られました。

MCは、国際交流語学学習センターのジョーダン・オケニィ職員。今年度は審査員に代わる講評者として、茨城県国際交流員のセドリック・チャールズ氏、本学から平田亜紀准教授、ケビン・マクマヌス助教、板垣浩正助教の計4名が、高校生の発表にコメント、質問を行いました。

えんじょうじ はつね

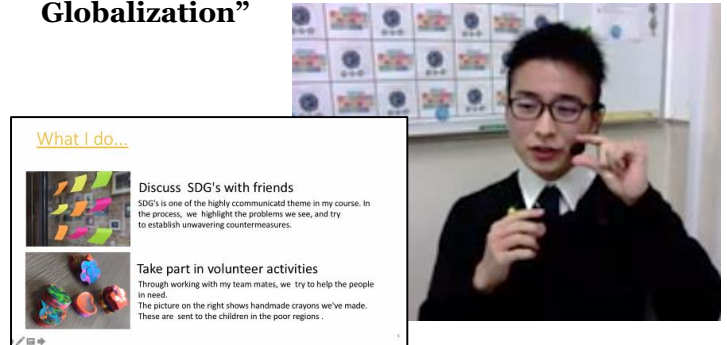
圓城寺 初音さん (東洋大牛久高等学校1年)
"Education Gap"



圓城寺さんのテーマは、教育格差。今年初め、新型コロナウイルス感染拡大を受けてほとんどの学校が休校となり、さらに一部でオンライン授業が開始されました。私立校は比較的早くオンライン環境を整えましたが、公立校はそうはいきませんでした。教育のオンライン化が進んでいるフィンランドと比較し、教育の機会は等しく保障されるべき、と、コロナ禍で見えた学校教育の課題を提起しました。

もろずみ かいと

両角 海人さん (市原中央高等学校2年)
"Interlocking our Cognition with Globalization"



発表テーマは、日本の学校教育のグローバル化。2度のアメリカ滞在で体験した学校教育と日本の学校教育を比較。これからの日本の学校教育に必要な3つのR—Regarding of No Age and Gender(年齢・性差にとらわれない)、Re-share the Experience and Discuss(体験を再共有し討論する)、Reconnect Ourselves with Neighbors(自分達が隣人と繋がりを築く)—を提唱しました。

にし の けいすけ

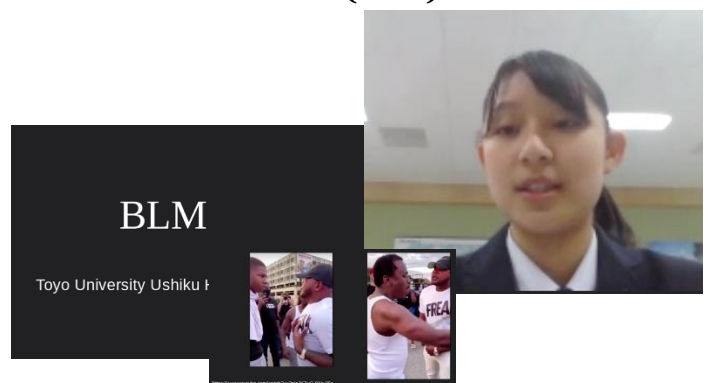
西野 圭祐さん (茨城県立日立第一高等学校2年)
"Road to a Brighter Future"



CO2の削減、という地球規模の課題にどう向き合うか。地球温暖化に起因して世界各地で発生する自然災害を減少するために、一人ひとりができること、として電気自動車への転換を提唱。ヨーロッパ諸国に比べて日本での普及率が低い現状に言及し、再生可能エネルギーに様々な産業が転換するために個人がどうしたら貢献できるのか、行動変容を促す力強いメッセージを発信しました。

さいとう あかり

齋藤 朱里さん (東洋大牛久高等学校1年)
"Black Lives Matter (BLM)"



テーマは、BLM(Black Lives Matter)。今年、アメリカで起きたアフリカ系黒人への警察による差別的行為に、人種を超えて異議を唱える動きが広がりました。理不尽な差別に抗議運動を起こす主人公たちは、自分達と同じ世代の若者たち。様々な差別は、どのような国・地域にも起こりえること、として、テーマの重みを聞き手と共有しました。

さくらい みり

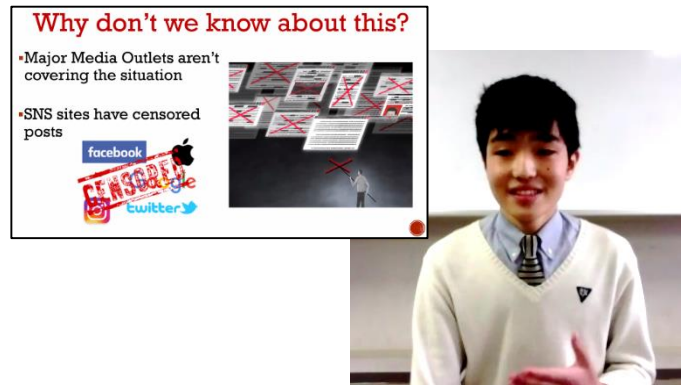
櫻井 美利さん (智学館中等教育学校 5年)
"What I Learned From The Covid-19 School Closure"



本年度コロナ禍で長期にわたった休校期間。最初はダラダラと過ごしていたけれど、途中で心を切り替え、オンラインでの授業に加え、フリビンと結びオンライン英会話に挑戦。さらに、親の仕事に関心を向け、コロナ禍でどのような苦勞があったのか、どう困難に対応しているのか、家族の対話も増えたと等身大で体験を披露し、共感が広がりました。

いしつか りょうへい

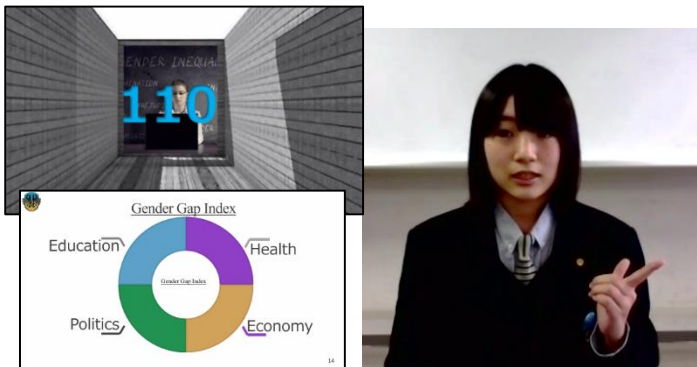
石塚 稜平さん (土浦日本大学中等教育学校 5年)
"Governments and the Power of Social Media"



SNS の画面で、つけまつげを整えながら若い女性が訴えるのは、中国の新疆ウイグル自治区で、今まさに起こっていること。この投稿に出会った石塚さんは、自分たちの現状を直接社会に向けて発信することが難しいとき、SNSは、他者が抱える困難でも、現実を社会に伝え、世論を喚起していく上で有効なツールになるのでは、と訴えました。

むらまつ

村松 あやめさん (土浦日本大学中等教育学校 5年)
"Gender Equality and Ideology"



「110」という数字—これは何を表すか。世界経済フォーラムが 2019 年に公表した、ジェンダー・ギャップ指数(経済、政治、教育、健康の 4 つの側面、各国における男女格差を測った指数)の日本のランキングです。先進諸国では最下位。村松さんは、とりわけ日本社会に残る男女差別と所得格差、女性の貧困が連鎖していることに着目し、格差を縮める意識と努力の必要性を説きました。

よこすか けいすけ

横須賀 桂介さん (常磐大学高等学校 2年)
"Xinjiang's Real Life"



テーマは、新疆ウイグル自治区で何が起きているか—奇しくも、石塚稜平さんのテーマと重なりました。横須賀さんが着目したのは、独自の文化、生活様式や習慣、信仰が奪われることの重さ。日本から離れている地域の出来事を伝える報道にも注目して、世界で何が起きいるのか、自分達はもっと敏感になって、まずは現実を知ること、そして課題を共有することが大切、と結びました。



全員の発表が終わったあと、講評者の 1 人、常磐大学総合政策学部の平田 亜紀准教授がファシリテーター役となり、相互に質問と感想を伝え合う時間を設けました。参加高校生それぞれが、自分以外の発表者に質問。なぜテーマの切り口がそれだったの? どうしてそんなに発音がいいの? 休校期間の巣ごもり中、自宅で食べていたアイスは何? 例年の国際交流パーティーに代わるひと時、緊張がほぐれて、画面越しに笑顔がこぼれました。



講評者 4 名を代表して、常磐大学人間科学部ケビン・マクマナス助教が総評を行い、発表者全員に、「Capacity」という言葉を贈りました。「Capacity」は、文脈によって様々な意味がありますが、コロナ禍で例年と全く異なる困難があった中、英語によるプレゼンテーションコンテストに参加を決め、テーマを深めて準備を行い、立派なプレゼンテーションに結実させたこと。それは、参加した高校生全員に「Capacity」(ゆとり、余裕)があった証で、将来にどれほど尊い経験になるか、感動を得た感謝と共に温かなメッセージとして伝えられました。